

「現詩研」2016夏の合宿二日目8月30日(火) 9時30分〜12時00分

会場 佛教大学京都二条キャンパス7階 N1〜741教室 レポーター・キタガワトオル

テキスト・大岡信の「初期詩篇」と第一詩集『記憶と現在』について

### 【発表のための気づき】

①発表は初期詩篇と第一詩集『記憶と現在』を中心にしめます。テキストは参加者が入手し易い(現代詩文庫24)『大岡信詩集』(思潮社)か、『自選大岡信詩集』岩波文庫かを用います。

②発表はテキストに基づいて、コピーしたレポートを使います。レポート(資料)は会場で配布します。

\*初期詩篇からは「朝の頌歌」「夏のおもひに」「夢の散策」「水底吹笛」「朝の少女に捧げるうた」「木馬」。

\*『記憶と現在』からは「青春」「うたのように123」「青空」「一九五一年降誕祭前後」「春のために」

「詩人の死」[Presence]。

③議論の参考にする論は以下のものです。

\*渡辺武信「大岡信論」(現代詩文庫24)の「解説」→長い論文なので、資料として出さず、発表の中で触れます。

\*小海永二「青春のうたから言葉の厚みへ」(国文学)1975年9月号)→『記憶と現在』に触れた初めの部分だけ、資料に出してあります。

\*三木卓「大岡信・作品論『記憶と現在』」(国文学)1975年9月号)→発表の中で触れます。

\*鮎川信夫「戯言風に」(ユリイカ)1976年12月号)→資料として出してあります。

\*岡田隆彦「共同体の意識と言葉の表現」(国文学)1994年8月号)→発表の中で触れます。

⑥年譜は以下のものを使います。四十歳の記述まで資料に収めました。

三浦雅士編「大岡信年譜」(現代詩読本)『大岡信』(思潮社)

【参考】「記憶と現在」には触れられていないが、(大岡信特集)として参考になるもの。

\*特集 大岡信の現在 (現代詩手帖)1981年3月号)

\*特集 大岡信 現代詩のフロンティア (現代詩手帖)2003年2月号)

### 【手軽に読める大岡信のアンソロジー詩集】

\*現代詩文庫24『大岡信詩集』(思潮社)

\*新選現代詩文庫108『新選大岡信詩集』(思潮社)

\*現代詩文庫153『続続・大岡信詩集』(思潮社)

\*『自選 大岡信詩集』(岩波文庫)

### 【連詩に関心のある人は】

\*大岡信『ヨーロッパで連詩を巻く』(岩波書店)

### 【解り安い入門書が読みたい人は】

\*大岡信・谷川俊太郎共著『対談 現代詩入門』(中央公論社)

### 【大岡信の短歌論や俳句論が知りたい人は】

\*大岡信『短歌・俳句の発見』(読売新聞社)

### 【大岡信の自伝を読みたい人は】

大岡信『詩への架橋』(岩波新書12)

【読んでも参考にならないばく(北川)の大岡信論】

\*北川透評論集『侵犯する演戯』(思潮社)の中に、二つの大岡信論「合わす」原理について「大岡信の方法ノート」と「感受性の規範」が収められています。当日それらを参考にして発表します。

大岡信 初期詩行より

『大岡信著作集 第三巻』

「水底吹笛(初期詩篇)」(一九四六一一九五二)より



朝の頌歌

朝は 白い服を着た少女である  
朝は

谷間から

泉から

大空の雲から

野末のささやかな流れから

朽ちた木橋のたもとから

その純白の姿を

風に匂はせながら静かに現れる

霧が無数の水滴となつて

静かに静かに降りそそぐ

黒い柔らかな土に

冬を蹴とばして萌え出た薄緑の若菜に

朝のしじまに籠る家々の屋根に

しじつと降つては

新鮮な色に映える

その時 霧の中には

清らかな髪の少女が微笑み

やがて地上は朝の歎びに溢れる

歎びは

朝の巻毛にしたたる

すつきりとすきとほつた

清い髪の中に宿るニumpfである

日が霧の彼方に

差ちらひつつ 紅らみながら昇つて来ると

地上にはほのかな弦の音が響いて

やがて 人々は

霧のひそかな手に目覚めつつ

今日も生命の歡喜に満ちて

無限の歴史の連鎖の一環を作り出す

(一九四七・一・六)

夏のおもひに

この夕 海への岩に身をもたれ。

ゆるくながれる しほの香に夕の諧調は 海をすべり。

いそぎんちやくのかよわい触手は ひそかにながれ。

とほくひがしに 愁ひに似て 甘く ひかりながれて。

この夕 小魚の群の ゑがく 水脈に

かすかな ひかりの小皺 みだれるをみ。

いそぎんちやくのかよわい触手は ひそかにながれ。

海の香と 胸とろかす ひびきに呆けて。

とらはれの 魚群をめぐる ひとむれの鷗らに

西の陽のつめたさが くるくろ落ち。

はなれてゆく遊覧船の かたむきさへ 愁ひをさそひ。

この夕 海への岩に身をもたれ。

このころひらかぬままに おづおづと 語りひもせず 別れしゆゑ

ゆゑもなく慕はれる人の 面影を 夏のおもひに ゑがきながら。

(一九四七・八・二四)

夢の散策

灰いろの舗道のうへに霧はながれ

たちならぶいでふの幹にたはむれながら――

そのあさ 私はひそかに舗道を行つた

霧のさそひに紛れいでて

遙かに みちひたひたと霧にまじはり

私のからだはあとをひいてながれていつた

よるこびもかなしみも乳白色にうすはてて

あをさめた優しさのみが あしたの夢に匂つてゐた

私の意志は麻痺してて

――おまへはどこへゆかうといふのだ

糸屑は霧にもつれてとくすべもなく

あけぼのの淡いひかりを待ちのぞみつつ

かしたれの舗道のうへに霧はながれ

しれひとのごつた胸にも光は射さうと

とほい思慕の蒼い海のきらめき恋うて

そのあさ 私はひそかに舗道を行つた

(一九四八・三・一〇)



水底吹笛

三月幻想詩

ひようひようとうえをふかうよ  
くちびるをあをくぬらしてふえをふかうよ  
みなぞこにすわればすなはほろほろくづれ  
ゆきなづむみづにゆれるはきんぎよぐさ  
からみあふみどりをわけてつとはしる  
ひめますのかげ——  
ひようひようとおれらにふえをきかさうよ  
みあげれば  
みづのおもてにゆれゆれる  
やよひのそらの かなしさ あをさ  
しんしんとみみにはみづもしみいつて  
むかしみたすぬしやうきゆうのつめたいゆめが  
けふもほくらをなかつたが  
うつすらともれてくるひにいのらうよ  
がらすざいくのゆめでもいい あたへてくれと  
うしなつたむすうののぞみのはかなさが  
とげられたわづかなのぞみのむなしさが  
あすののぞみもむなしからうと  
ふえにひそんでうたつてゐるが  
ひめますのまあるいひとみをみつめながら  
ひとときのみどりのゆめをすないうつし  
ひようひようとうえをふかうよ  
くちびるをさあをにぬらしふえをふかうよ

朝の少女に捧げるうた

おまえの瞳は眼ざめかけた百合の球根  
深い夜の真綿の底から  
朝は瞳を洗いだす そして百合の球根を  
おまえの髪はおまえの街の傾いた海  
光の輪が 無数のめまいと揺れている海  
おまえの潮の匂いだって嗅げるのだ ぼくは  
おまえの腕は鉄のように露を帯びる  
おまえの脚は車軸の速さで地下道を抜ける  
おまえのからだの曲線は光の指に揉まれているが  
そのいたすらがいつもおまえを新しくする

木馬

夜ごと夜ごと 女がひとり  
ひっそりと旅をしている (ポール・エリュアール)

日の落ちかかる空の彼方  
私はさびしい木馬を見た  
幻のように浮かびながら  
木馬は空を渡っていった  
やさしいひとよ 窓をしめて  
私の髪を撫でておくれ  
木馬のような私の心を  
その金の輪のてのひらに  
つないでおくれ  
手鏡のように

詩  
『木馬』  
と  
見  
た  
よ  
う  
に



青春

あてどない夢の過剰が、ひとつの愛から夢をうばった。おごる心の片隅に、少女の額の傷のような裂目がある。突堤の下に投げ捨てられたまぐろの首から吹いている血煙のように、気遠くそしてなまなましく、悲しみがそこから吹きでる。

ゆすれて見える街景に、いくたりか幼いころの顔が通った。まばたきもせず、いずれは壁に入ってゆく、かれらはすでに足音を持たぬ。耳ばかり大きく育って、風の中でそれだけが揺れているのだ。

街のしめりが、人の心に向日葵でなく、苔を育てた。苔の上にガラスが散る。血が流れる。静寂な夜、プラスチックから水が溢れて苔を濡らす。苔を育てる。それは血の上澄みなのだ。

ふくれてゆく空。ふくれてゆく水。ふくれてゆく樹。ふくれる腹。ふくれる眼蓋。ふくれる唇。やせる手。やせる牛。やせる空。やせる水。やせる土地。ふとる壁。ふとる鎖。だれがふとる。だれが。だれがやせる。血がやせる。空が救い。空は罰。それは血の上澄み。空は血の上澄み。

あてどない夢の過剰に、ぼくは愛から夢をなくした。

うたのように 1

湖水の波は寄せてくる  
たえまなく岩の頭を洗いながら

底に透きぬの砂には波の様が……  
それはわたしの中にもある  
悲しみの透明なあり方として

うたのように 2

教室の窓にひらひら舞っているのは  
あれは蝶ではありません  
枯葉です

墓標の上にとまっているのは  
あれは蝶ではありません  
枯葉です

君と君の恋人の胸の間に飛んでいるのは  
あれは蝶ではありません  
枯葉です

え 雪ですか  
さらさらと静かに無限に降ってくるのは  
ちがいます 天に溢れた枯葉です

裸の地球も新しい衣装を着ますね  
あなたの眼には葉脈がひろがりましたね  
夜ごとにぼくらは空の奥へ吹かれるんですね

あ あなたでしたか 昨夜ぼくを撫でていたひと  
すみません 忘れてしまつて  
だれもかれも手足がすんなり長くなって  
舞うように歩いていますね

うたのように 3

十六才の夢の中で、私はいつも感じていた、私の眼からまっすぐに伸びる春の舗道を。空にかかつて、見えな  
い無数の羽音に充ちて、舗道は海まで一面の空色のなか  
を伸びていった。恋人たちは並木の梢に腰かけて、白い  
帽子を編んでいた。風が綿毛を散らしていた。

十六才の夢の中で、私は自由に溶けていた。真昼の空  
に、私は生きた水中花だった。やさしい牝馬の瞳をした  
年上の娘は南へ行つた。彼女の手紙は水蓮の香と潮の匂  
をのせてきた。小麦色した動物たちは、私の牧場で虹を  
渡る稽古をつづけた。

私はすべてに「いいえ」と言った。けれどもからだ  
は、躍りあがって「はい」と叫んだ。

## 青空

最初、わたしの青空のなかに、あなたは白く浮かびあ  
がった塔だった。あなたは初夏の光の中でおおきく笑っ  
た。わたしはその日、河原におりて笹舟をながし、溢れ

る夢を絵具のように水に溶いた。空の高みへ小鳥の群は  
ひっきりなしに突き抜けていた。空はいつでも青かつ  
た。わたしはわたしの夢の過剰でいっぱいだった。白い  
花は梢でゆさゆさ揺れていた。

2

ふたたびはその掌の感触に  
わたしの頬の染まることもないであろう  
その髪がわたしの耳をなぶるには  
冬の風はあまりに強い

わたしの胸に朽葉色して甦える悲しい顔よ  
はじめからわかつてたんだ  
うつむいてわたしはきつく唇を噛む  
今はもう自負心だけがわたしを支え  
そしてさいなむ

ひとは理解しあえるだろうか  
ひとは理解しあえぬだろう  
わたしの上にくずれつづける灰色の冬の壁  
空の裂目に首を出して  
なお笑うのはだれなのか  
日差しはあんまり柔らかすぎ  
わたしのなかの瓦礫の山に こわれた記憶に

ひとはゆるしあえるだろうか  
ひとはゆるしあうだろう さりげない微笑のしたで  
たえまなく風が寄せて  
焼けた手紙と遠い笑いが運ばれてくる  
わたしの中でもういちど焦点が合う  
記憶のレンズの……  
燃えるものはなにもない!

明日こそわたしは渡るだろう  
あの吊橋  
ひとりづつしか渡れないあの吊橋を  
思い出のしげみは 二月の雨にくれてやる

## 一九五一年降誕祭前後

——朝鮮戦争の時代——

雨に濡れた椅子から垂れさがる 死  
公園のこちらの隅から煙っている街はずれまで  
黒塗りの静かな椅子の葬列……  
おれたちの青春は雨にうたれてる

言え おれたちのために  
どのような春が どのような夢が  
荒野の涯に生きながらえて輝いているか  
みよ 十円札の皺のような心の皺と  
飛び散った肉が焼杭にはりついている  
冬の空——おれたちの焦げた空間  
落ちた太陽を踏んで

かなたに酷薄な夜を組織する者は誰か  
おお 敵だけがおれたちの不幸な生身を  
証明する今？

紙上に撒かれた鉄の粒子  
黒い磁場に整列する  
日本列島……

悲しめ  
悲しむならば岩のごとく

注げ 注げ 沖の深みへ 夜の河よ  
五百万の悲しみの眼を泥の中に隠らせるため  
おれたちの世紀のゴルゴタ 海を越えた彼方の丘に  
旗は落ちる ユマニテの微笑はちぢれる

耳の回路をめぐってくる軍靴の遠鳴り  
その低音のどよもしのそよぐ原始の  
そのタムタムの……告発せよ  
服従し はや陶酔を夢みはじめる  
扁平な耳を

雨にうたれた黒塗りの青春  
死を分泌しそれによって肥ってゆくおれたち  
腐敗はすでに純潔の影の部分  
その人知れぬ成熟にはかならぬ

みよ 灰色の曙に  
隠湿の地にふるえる影をおとしている茸のむれ  
おびたらしい流血に  
地の塩は おれたちにはもう  
過剰である

春のために

砂浜にまどろむ春を掘りおこし  
おまえはそれで髪を飾る おまえは笑う  
波紋のように空に散る笑いの泡立ち  
海は静かに草色の陽を温めている

おまえの手をぼくの手に  
おまえのつぶてをぼくの空に ああ  
今日の空の底を流れる花びらの影  
ぼくらの腕に萌え出る新芽  
ぼくらの視野の中心に  
しぶきをあげて廻転する金の太陽  
ぼくら 湖であり樹木であり  
芝生の上の木洩れ日であり  
木洩れ日のおどるおまえの髪の段丘である  
ぼくら

新らしい風の中でドアが開かれ  
緑の影とぼくらを呼ぶ夥しい手

No4

道は柔らかい地の肌の上になまなましく  
泉の中でおまえの腕は輝いている  
そしてぼくらの睫毛の下には陽を浴びて  
静かに成熟しはじめる  
海と果実

詩人の死

——ニルニールの追憶のために——

真昼の井戸の底に輝く星のように  
陽を照り返す葉の海のように  
深みに生れおもてに浮びひろがり生き  
愛のさなかの悔恨のように  
悔恨ののちの愛のように  
鋭く痛み  
やさしさに哭き

太陽の周囲を旅し  
星の岸に最後の女と眠り  
ひとり湖底にめざめ  
風に乗って夢を運ぶ男となる  
皮膚にあまたの季節をとざし  
すべての男の父親となる 息子となる……

(風はあまたの死をみとどけて  
今日丘の上でうたっている  
彼は死んだ 彼は死んだと  
雪にうもれて彼は消えた)

夥しい太陽と岩と驟雨と若さと  
廢墟を歩む正しい夢が  
不幸にせずむ時代を横切る  
静かな歩みをとめてしまった  
何という異様な重みを伝えることか  
手に重い数冊の本  
墓に変わった言葉の城よ

彼の宇宙のとまり木のうえに  
今もなお歌おうとする者はいるか  
彼の閉じた眼のなかに  
今もなお太陽と人は輝いているか  
彼の爪と彼の愛は  
今もなお星を岩に刻んでいるか

街路に緑のしたたる日にも  
海が静かに身を洗うたそがれ時にも  
愛が不意に発熱する夜のひき明けにも  
彼を想え 彼は世界を好きだったから  
みよ すべてが過ぎゆくものならば  
先立つ者とおくれる者があるばかりだ

彼の死は時を超えたあらたな時への 出発にすぎぬ……  
すべてのものが出発する  
夥しい出発の群でふるさとはいもう見分けがつかぬ  
空間だけがぼくらの所有 ぼくらは自由だ  
かくてすべてがぼくらの腕に戻るだろう  
すべてが過ぎゆくものなるがゆえに

ぼくらの旅はきびしさを増し  
あちこちに

焰を運ぶ深夜の雪が見られるあたり  
生身は別離と運返の湖となり  
不思議な調和にひたるだろう

朝にはみたまえ 海に映るぼくらの隣に  
彼の顔が映るだろう

見廻したとて彼の姿は  
空のどこにもないのだけれど

## Présence

### 第一歌

おれはものうく夕暮をすくいとっては、窓のようにく  
れてゆく、てのひらの上に光を流して眺めていた。波音  
の絶えた脳の浜辺で、もう計画もあらかた枯れた。坂の  
上から夕陽を浴びておりながら、生え出た尻尾を気にし  
ていたお嬢さんにはまだ計画があった。もう計画は出つ  
くした。水をゆっくりかきわけるほどの、身じろぐ自由  
があるばかりだ。

ゆうべ病気が耳もとに来て、あぐらをかいてこう言っ  
た。「きみの体も見晴らしがよくなってきたな。方々空  
席だらけだぜ」。前の日は親しい女が陸橋の手すりにも  
たれて咳いた。「煙が散るわね。もう秋ですもの。あた  
しも何とか身のより方をきめなくちゃ」。往つてしまえ。  
往つてしまえ。秋空のくぼみにはげしく突きささり、下  
りてくるのを忘れてしまった若い眼玉、その青いナイフ  
の光よ。

おれの中には秤があって、夏の白い岩の上や飛込台に  
立つときには、難破船の羅針盤をもしのごほほどに激しい  
歓喜に揺れることもあるのだが、稀な嵐だ。夜も昼も秤  
はおれを水平線に平行に針づける。おれは激しい沸騰を  
忘れ、地平を匍う蟻になった。砂を掘っては月光を溜  
め、輝きながら泳ぐおれの幻影を見た。おれに何ができ  
ただろう。おれの中で組織された平衡感覚、それがおれ  
を現在につなぎとめる。沙漠へ走るおれの夢を、ピンと  
める。やがて夢は法外に重くなって、おれはむしろ平衡  
を失ったのだ。もう計画は出つくした。種子を刈る時  
期？ むしろ石に種子をまこう。

ゴシックの塔に憧れた日は石庭を歩き、おれはおれの  
矛盾を愛した。遠いものこそ硬さゆえにおれの中に素直  
に入った。飛び去って再び帰らぬ切線も、おれの中へは

ひそかに帰った。水槽の底に生きながら、おれは遠さを  
組織した。おれはいい学生だった。ポーチにまどろむ忘  
け者の太陽をおれは憎んだ。原始林のしめりに無縁な陰  
湿の土地をおれは憎んだ。だがおれは、遠さへ逃れて何  
を得た？ おれのつくつたすべての構図は乾いていた。  
モダン・アートの貧血症が、おれの片肩あげるほどの潔  
癖には似つかわしかった。おれの構図は乾いていた。走り  
まわる血管が激しく押し出す汗の光はそこになかった。  
だが歳月をあとにした今、湿っていたのは何だったか。

おれは内部に悪い汗をしたらせていた。

### 第四歌

これは笑いと悲しみに満ちた地獄だ。

街は海だ。空は死んで、底抜けに青い。おれは茶色い  
海草をわけて歩いてゆく。激んだ海。いつでも激んだ海  
だ。おれの腕の筋肉に一瞬雲が流れる。おれは巨人にな  
って通りを下つてゆく。

五〇年代。これはばかげた笑いに満ちた地獄だ。

おれがゆくと、小さな窓から眉毛の深く垂れさがった  
男や女がそと覗いて囁きあう。「詩人が通るよ。死人  
が通るよ。」でおれは、一層深い海の底へ下つてしまふ。  
それでも家並は絶えないのだ。

賦つまづく。裸の女が藻にまかれ、首だけ出して微笑  
んでいる。元来おれは、寝ているやつは好かないのだ。  
そう思ったとき、おれはタツノオトシゴになって直立  
し、揺れている家並のわずか上の方にとまつてしまつ  
た。おれがみた、半透明の階段のない雲のない世界。

貝が花を開いていた。柔かな窓よ。遠い煙が、おれの  
記憶に垂線を引き、おれは内部に座標軸が作られるのを  
感じとる。おれがむかし見た石が、湖水に斜めに生えて  
いた葦の茎が、重なって消えた女の臉が、おれの中でい  
ま空間になる。

まことにおれは、甚だしく開花を夢みてさまよった。  
甚だしい感性の開花、時間のみごとく空間化を。光のは  
せる炉であった花よ。濡れて浜辺を輝やかせていた砂利  
よ。おれの地図におかれた基石よ。空に深く突きささつ  
た柱のさきで、広大な天と釣合っていた十八才よ。

戦争がおれの美感を形造った。おれは醜いばかり結び  
の法則を憎み、ついたちごとの神社の祝詞に日本語の表  
情を知った。おれは英語を愛した。かかり結びがあぐら  
をかいて頭の隅でさせるをばんばん叩いているとき、お  
れは英語の抽象的な前進に憧れていた。窓をかすめる松  
の香に、おれは海の方角ばかり求めていた。

水族館。魚は緑の鳥だ。太陽は紫の昔にからまった泡



の中にとらえられては破裂した。おれはしばしば、生簀をめぐる鯛の群に星を見た。おれはだんだん水の世界を愛しはじめた。女のあわい体臭をかぐと、おれの中でくずれながら硬直するあおくさいものがあつた。

やがて炎の季節が来た。「おまえの中の小さな炎の平和こそ焼き尽さねばならないのだ」。沈んだ声が囁いて遠ざかった。おれは待った。炎はある秋、女の眼の奥にかくれて現われた。だがそれがおれの中によびさましたのは、おれ自身の再組織だった。炎は苛酷な抽象だ。その中でおれは記憶を喪失した。イメージがとどまることなく溶解し、転位するとき、記憶とは行為、純粹な意識の行為にほかならぬ。過去こそそこに欠けたもの、おれははげしく現在に生きた。

さみしい春。おれは風に吹かれながら、街を行った。炎の記憶を、おれの記憶の地図の上にとどのように置くか迷いながら、おれは街を通り抜けて野原を行った。雲が焼け、魚が天を泳いでいた。大きな手が地平線を指さした。しぶきをあげて落ちてゆく陽の内側に歩み入って、おれは盲いた。だがおれは、体全体、眼になったのだ。手になったのだ。あらゆるものを太陽の位置でおれは見えた。見たものはすでに触っていた。おれははげしく開花したのだ。

歌が聞える。

▲おお いかにも焦れつつあるや言いうる者  
▲いとちさき炎のうちにあり

おれはどこへも行ける身だった。おれはえらんだ、海の街を。いまおれは、流れの中途に浮かびながら、薬の伸びあがるかすかな音を聞いている。薬が生え出るのは、おれの中か、砂地の上か。おれは耳を澄ませながら、どこでもいいと呟いた。おれにはものの形が見える。イメージが、視覚を越えて触覚のうちに飛びこんでくる。おれは知った、イメージの内側にこそ休息がある。と。

だが聞えるか、遠くおれの心を誘ってよびかける声。抽象こそ、人を前進させるのだ、と。おそらくは、おそらくはおれも再び歩み続けねばならぬ。はるかな空で炎がおれをよびつつけるのだ。おれは今知っている。おれに何が必要であるか。濡れずに海から躍り出ること。

明日おれは鮫であるかもしれないのだ。  
だが明日おれは風であるかもしれないのだ。  
旗であるかもしれないのだ。

## 戯言風に

鮎川信夫

「大岡信は、言葉を綿菓子のように練出すことができる少数の詩人のひとりである。機械の真中に少量のざらめをいれてすずかに熱しながら回転させる。やがて機械につっこんだ棒には綿のようなあめがからみあい膨らんでくる。まるで無から有をうみだしたようにおもわれるのが綿菓子の特徴である。」

これは、十五年ほど前に吉本隆明が、大岡信の『抒情の批判』の書評を「週刊読書人」に載せたときの冒頭の文句である。二枚ほどの短かい書評だったが、他の部分はともかく、この冒頭の文句がながいあいだ私の頭に残っていて、大岡信の文章に擬しているときにひよいと浮んできたりして苦笑するようなことがしばしばあつた。

少量のざらめを綿菓子に変化させる大岡信の手際は、みそおでんとかたこ焼とかを売っている不器用者たちにくらべると、あれよあれよと呆れるほど鮮やかで、ロマンティックで上品に見える。これを作る秘訣は、金属製の丸い箱の内側に発生した霞のような綿アメを、割箸の棒に格好よく膨らませて巻きとるところにあるが、相当の習練を要し、素人にはできない芸当なのだ。

綿菓子は素朴な食物の芸術で、祭りには欠かせない要素の一つである。なんだ、もとは少量のざらめではないかなどと野暮なことは言わない。祭り見物に行くと、私はよく綿菓子屋の前に立ちどまって、その手際を眺めることがある。やはり、子供の頃に経験した、顔にあたるふわっとした感触と、舌にさわるとすぐに融ける、ちょっとたよりない甘さの感覚を懐しんで、そこにひきつけられるのである。食欲を満たすだけの他の食物とちがって、代替物が見当らないところとか、必要から遠く距っているということが、綿菓子を芸術に似せて高級なものにしているゆえんではないかと思う。

そんなわけで私は、綿菓子屋を眺めるような眼で、ペン先に言葉を書きとる大岡信の技術を、ただただ服感して見守ってきた。半ば呆気にとられて、と言ったほうがいいかもしれない。私などには、箸にも棒にもかからないと思われなような対象でも、彼の手にかかると驚ろくほど甘美なものに変ってしまうのである。そこには、むろん、技術以上のものが働いていたにちがいないのだが、それが何であるかはなかなか気がつかなかったのである。ひよっとすると、私は今でも気づいていないのかもしれない。

大岡信の文章に初めて出遭ってから廿年くらいになるであろう。その間、眼にふれるかぎり彼の文章は読んでいくし、何かの会議や座談の席上で言葉を交したことも数えきれないくらいある。それでいて、大岡信における「言葉の技術」以上のものとなると、確かなことを言える自信はあまりないのがある。こんなにながいつきあいでも、肝心のところがわからないというの、私自身の怠慢か無能のせいということになりそうだが、かならずしもそうとはやはり言えなくて、彼が日本の批評家としては類のない新しいタイプの人間だということにも、一半の理由を求めることができそうである。

批評家が批評家を批評すれば、たいていどちらかが傷つくはずののだが、彼はそういうたぐいの批評家ではない。そして、それは温厚篤実とか冷静沈着といった人格とか性格に

由来するというよりは、批評のタイプとしてそうなのだと  
うほかはないのである。

「言葉の技術」以上のもの、と言ったが、もしかしたら、そんなものは、彼には存在しないのかもしれない。芸術も宗教も政治も「言葉の技術」の問題であり、人間のあらゆる行為は言葉に発し言葉に帰結するものであるから、彼にとつて「言葉の技術」は突極のものとして意識されているのかもしれない。

本当のところ、私には大岡信がまだよくわかっていないと言ふべきであろう。見る人としての彼なら少しはわかるが、見られる人としての彼は、あまりにも透明すぎてよく見えないのである。見たり見られたりする相互の関係において、彼はたやすく正体を見せるようなことはしない。いつも一方的に見られていような感じなのである。

私は、彼のことを理解魔と呼んだことがある。そう呼んだときから、「理解」を半ばあきらめてしまったようなフシがないでもない。理解魔を理解するなんて、とても困難なことだからだ。

それに私は、彼の芸術信仰を見越して言うわけではないが、善良なデーモンが苦手だ。善良なうえに、とびきり頭のいいデーモンときている。もう、お手あげである。

# 大岡信年譜

## 三浦雅士編 三浦あさず、とりあさず、四十歳まで。

Hirata masashi

昭和六年(一九三二)  
二月十六日、静岡県田方郡三島町に、大岡博、綾子の長男として生まれる。大岡家は代々徳川家に仕える旗本であったが、維新後、曾祖父は駿府へ引退する徳川慶喜に随行し、三島で警察署長となつてゐる。祖父は温暖清流のこの町の生活に安住せず、貿易商を志し、横浜、神戸、ついで上海に渡つて客死した。父・博は、教育者の道を選び、そのかたわら歌人として多くの子弟を育てた。三島、また近隣の沼津という自然環境は、海、空、砂浜、あるいは霧など、後の大岡信の詩作品に大きな影響を与えている。

昭和十二年(一九三七) 六歳  
小学校入学。「童話で今なおぼくの記憶の底に残らずに残っているのは、アルスから出ていた数十巻の児童読物の全集の中にあつた、『印度童話集』の死人たちの世界である。」(大岡信・わが前史)  
昭和十八年(一九四三) 十二歳  
静岡県立沼津中学校に入学。

昭和二十年(一九四五) 十四歳  
八月、敗戦。「ぼくにとつて、詩のはじまりは、結局この日以後のことであつたのだと思う。『何が決定的に失われることが、この世界には必ずあるのだ』という認識の獲得の日であつたのだ。」(大岡信・わが前史)

昭和二十一年(一九四六) 十五歳  
短歌および詩を書きはじめる。「年長の友人のようだった二人の教師、茨木清氏と中村喜夫氏のまわりに親しい友人数名が集つて、『鬼の詞』という雑誌を作つた。焼跡の掘立小屋のような中学校の校舎で、日暮れにガリ版を刷つた。リルケ、日本浪漫派、中村草田男、ドビュッシー、立原道造、そして子供っぽい天文学などがぼくのなかにロマンチックに変貌しながら住んでいた。」(大岡信・記憶と現在・あとがき)

昭和二十二年(一九四七) 十六歳  
沼津中学四年から一高文科内類に入学。新任教官として寺田透がいた。同級に丸山一郎(佐野洋)、稲葉三千男ら、上級に村松剛、日

野啓三らが出た。「十五、六歳以後の私にとつて目のさめるような経験だつたのは新古今集との出会いで、これは私がフランス文学に興味をもつていたということと関係があつたようです。私は大学へ進むときには、成績不良で第三志望の国文学科へ回されたのですが、旧制高校時代から、フランス文学、とくにボードレール以後の詩に強くひかれていました。……高等学校の寮の薄暗い部屋の万年床の上で、新古今とボードレールを並べて読んでいたような状態です。」(大岡信・黄之のゆかり)

昭和二十三年(一九四八) 十七歳  
詩「夢の散索」「喪失」「心象風景」など『水底吹笛』に収められる詩群のいくつかを執筆。十一月、詩「ある夜更けの歌」を校内紙『向陵時報』に発表。この頃、友人を通じて相沢かね子と知り合う。

昭和二十四年(一九四九) 十八歳  
「青春」「夢のひとに」「水底吹笛」「懸崖」など、後、詩集『記憶と現在』の「夜の旅」に収められる一群の作品、および『水底吹笛』に収められる一群の作品を執筆。恋愛の奇妙な逆説性が主なテーマとなり、暗鬱な色彩のものが多い。

昭和二十五年(一九五〇) 十九歳  
東大国文科へ進む。栗田勇、飯島耕一、東野芳明らと知り合う。この頃、数度にわたつて、父の主宰する歌誌『菩提樹』に詩および評論を発表。八月、丸善を通して手に入れた『エリュアール詩集』を読み「そして空はおまえの唇の上にある」の一行に衝撃を受ける。

昭和二十六年(一九五一) 二十歳  
三月、日野啓三、丸山一郎、稲葉三千男らと雑誌『現代文学』を創刊。後に「記憶と現在」の「夜の旅」に収められる一群の詩作品のほか、エリュアールの翻訳、菱山修三論などを発表。

昭和二十七年(一九五二) 二十一歳  
詩作上の転機となつた作品「海と果実」(後「春のために」と改題)を大学内で有志が発行した新聞に発表。「彼の詩的出発を端的に言えば、それはみずみずしく温和な日本の感性による抒情と、エリュアールの芸術前衛的ではあるが明澄な表現との合体であつた。秀作「春のために」は、その精神的出会いの幸福を示している。」(清岡卓行・新潮日本詩人全集34)八月、エリュアール論を執筆。十一月、『赤門文学』(復刊一号のみ)に、詩および評論「エリュアール」を発表、中村真一郎によつて『文学界』同人雑誌評にとりあげられる。十二月、卒業論文「夏目漱石——修善寺吐血以後」脱稿。

昭和二十八年(一九五三) 二十二歳  
四月、東大卒業後、読売新聞社に入社、外報部記者となる。八月、『詩学』に「現代詩試論」を発表。以後、詩論を断続的に発表してゆく。

昭和二十九年(一九五四) 二十三歳  
書肆ユリイカ社主・伊達得夫を知る。九月、ユリイカ版『戦後詩人全集』に作品が収録される。同月、川崎洋、茨木のり子、谷川俊太郎、吉野弘らの詩誌『権』に参加。

昭和三十年(一九五五) 二十四歳  
六月、評論集『現代詩試論』をユリイカより刊行。

昭和三十一年(一九五六) 二十五歳  
六月、飯島耕一、東野芳明、江原順らと「シュルレアリスム研究会」を開く。後に、村松剛、菅野昭正、清岡卓行、針生一郎、中原佑介らも参加。瀧口修造と知り合う。七月、第一詩集『記憶と現在』をユリイカより刊行。『ユリイカ』創刊第二号に中原中論を発表。





昭和三十三年(一九五八) 二十六歳  
三月、詩誌『今日』(平林敏彦、飯島耕一、清岡卓行ら)に七号より参加。以後、詩「さわる」「声」「転調するラヴ・ソング」などを発表。四月、相沢かね子と結婚。

昭和三十三年(一九五八) 二十七歳  
三月、評論集『詩人の設計図』をユリイカより刊行。十月、長男、玲誕生。

昭和三十四年(一九五九) 二十八歳  
八月、吉岡実、清岡卓行、飯島耕一、岩田宏らと詩誌『鰐』を創刊。以後、詩「夢の書取り」「お前の沼を」「冬」「大佐とわたし」などを発表する。この年、現代美術を中心に仕事を始めていた南画廊社主・志水楠男の依頼でフォートリエ展のカタログ作成に協力。以後同画廊を中心に加納光於ら現代美術家と親しむ。

昭和三十五年(一九六〇) 二十九歳  
一月、はじめての詩劇『宇宙船ユニヴェル号』NHKより放送。六月、草月アート・センターの機関誌『SAC』刊行にともない同誌に芸術批評を断続的に寄稿。「赤坂に草月会館ができ、多くの若い音楽家や映像作家や舞台人の最も新しい仕事は定期的な発表されるようになって、私は武満徹をはじめ何人も同世代の音楽家たちを親しく知るようになった。」(大岡信・武満徹と私)九月、評論集『芸術マイナス』を弘文堂より刊行。十二月、ユリイカより『大岡信詩集』を(今日の詩人双書7)として刊行。『記憶と現在』からの抄録を第一部、後「転調するラヴ・ソング」として独立する部分を第二部とする。この年、サム・フランシスと知り合う。

昭和三十六年(一九六一) 三十歳  
一月、伊達得夫死去、『ユリイカ』終刊。四月、「保田與重郎ノート」を含む評論集『抒情の批判』を晶文社より刊行、三島由紀夫に激賞される。六月、『文学』特集「道元」にエッセイ「華開世界起」を寄稿。

昭和三十七年(一九六二) 三十一歳  
九月、『鰐』終刊号に詩「マリリン」を発表。十月、詩「環礁」による武満徹作曲の「ソプラノとオーケストラのための『環礁』」初演。「ソプラノの声に溶けこんだぼくの言葉は、キラキラ輝く水摘になって空に飛散してしまつたような鮮烈な印象を与えた。」(大岡信・覚書一九六五)十二月、詩集『わが詩と真実』を思潮社より刊行。

昭和三十八年(一九六三) 三十二歳  
二月、長女、亜紀誕生。三月、読売新聞社退社。六月、評論集『芸術と伝統』を晶文社より刊行。十月、『現代詩手帖』に詩「ことばことば」を発表。同月、パリ青年ビエンナーレ詩部門に参加のため渡仏、日本の戦後詩を紹介する。

昭和三十九年(一九六四) 三十三歳  
一月、帰国。『現代詩』に「日本ーパリー日本」を四、五、六月と連載。この年ラジオ作品数篇。

昭和四十年(一九六五) 三十四歳  
二月、エッセイ集『眼・ことば・ヨーロッパ』を美術出版社より刊行。四月から『文学』に「昭和詩の問題」を断続的に連載。同じく四月、明治大学非常勤講師に、十月、助教教授に就任。十二月、評論集『超現実と抒情』を晶文社より刊行。

昭和四十一年(一九六六) 三十五歳  
一月、「言葉の現象と本質」を『放送朝日』に連載(一―三月)。三月、エッセイ集『文明のなかの詩と芸術』を思潮社より刊行。五月、放送劇『写実はどこへ行った』NHKより放送。十月、放送劇『化野』NHKより放送。十一月、詩「わが夜のいきものたち」を『現代詩手帖』に発表。この年から翌年にかけて、思潮社版『現代詩大系』(全七巻)に通巻解説として「戦後詩概観」を連続執筆。

昭和四十二年(一九六七) 三十六歳  
四月、評論「眼の詩学」を『季刊芸術』創刊号に執筆。同月、詩「地名論」「現代詩手帖」に発表。八月、『中央公論』に芸術時評を連載(一四三年五月)。九月、「言葉の現象と本質」を含む評論集『現代芸術の言葉』を晶文社より刊行。

昭和四十三年(一九六八) 三十七歳  
二月、単行本としては未刊の詩集群、「物語の人々」「水の生理」「献呈詩集」「わが夜のいきものたち」「方舟」を含む総合詩集『大岡信詩集』を思潮社より刊行。十二月、『文学』特集「詩の言葉」に評論「言葉の出現」を発表。

昭和四十四年(一九六九) 三十八歳  
一月、『芸術新潮』に美術家論を連載。二月、評論集『現代詩人論』を角川書店より刊行。同月、創作「金色の夢」を『婦人之友』に執筆。四月、『国文学』に「日本詩歌の鑑賞」を断続連載。同

月、昭和詩の問題、戦後詩概観を含む評論集『薄児の家系』を思潮社より刊行。六月、同書により第七回歴程賞を受賞。同月、中央公論社より、芸術時評を中心とした評論集『肉眼の思想』を刊行。同月、「金色の夢」放送劇としてNHKより放送。七月、青土社より復刊された『ユリイカ』に「断章」を連載。以後、独得なスタイルによる批評を持続的に展開してゆく。同月、『櫻』十八号に詩「あかつき葉っぱが生きている」を発表。同月、思潮社より現代詩文庫版『大岡信詩集』を刊行。同月、放送劇『化野』を大きく改作した戯曲「あだしの」が劇団「雲」により紀伊国屋ホールにて上演される。十二月、散文詩「彼女の薫る肉体」を『都市』創刊号に発表。

昭和四十五年(一九七〇) 三十九歳  
二月、「窪田空穂論」を『文学』に断続連載。十月、明治大学教授に。この年、安東次男、九谷才一らと連句の会をはじめ。

昭和四十六年(一九七一) 四十歳  
三月、放送劇『イグドラジルの樹』NHK・FMより放送。五月、『彼女の薫る肉体』を湯川書房より刊行。九月、評伝『紀貫之』を筑摩書房より刊行。十月、評論集『言葉の出現』を晶文社より刊行。

大岡信の初期詩集『わが詩と真実』の現在



# 青春のうたから言葉の厚みへ

大岡信の詩の道程は、わたしの考えをこく図式的に示せば、右に掲げたこの小エッセーの表題の言うところに尽きる。以下はその作品を例にあげて、わたしの図式のやや具体的な跡づけということになるだろう。

まず「青春のうた」ということだが、彼の処女詩集『記憶と現在』(昭和31年)の初めの方に収められた「夢のひとに」「うたのように1・2・3」などの詩や、全詩集版『大岡信詩集』(昭和43年)中の「方舟(初期詩篇)」の章に収められた「夏のおもひに」「水底吹笛」「海と夫人」「木馬」などの詩を読むと、この詩人が、夢多く感受性豊かなひとりの少年として、極めて幸福な抒情への陶酔を体験するところから、詩作を始めたということがよくわかる。

△詩を書きはじめたのは一九四六年、敗戦の翌年からだった。ぼくらには年長の友人のようだった二人の教師、茨木清氏と中村喜夫氏のまわりに親しい友人数名が集って、『鬼の詞』という雑誌を作った。焼跡の堀立小屋のような中学校の校舎で、日暮れにガリ版を刷った。リルケ、日本浪漫派、中村草田男、ドビュッソン、立原道造、そして子供っぽい天文学などが、ぼくらのおなかにロマンチックに変貌しながら任んでいた。あれからもう十年近い。▽

右に引いたのは『記憶と現在』の「あとがき」中の一節で、この書き方自体が回想の甘さを含んでロマンチックだが、大岡信の詩的な眼覚めがどの辺にあつたかをほぼ推測させるに足る文章である。そして、その当時の大岡信の青春というものは、詩的変形<sup>メタモルフォーゼ</sup>ということを考慮に入れてもお、次のように歌われるものであつたに違いない。

十六才の夢の中で、私はいつも感じていた、私の眼からまっすぐに伸びる春の舗道を。空にかかつて、見えない無数の羽音に充ちて、舗道は海まで一面の空色のなかを伸びていった。恋人たちは並木の梢に腰かけて、白い帽子を編んでいた。風が綿毛を散らしていた。

十六才の夢の中で、私は自由に溶けていた。真昼の空に、私は生きた水中花だった。やさしい牝馬の瞳をした年上の娘は南へ行った。彼女の手紙は水蓮の香と潮の匂をのせてきた。小麦色した動物たちは、私の牧場で虹を渡る稽古をつづけた。

私はすべてに「いいえ」と言った。けれどもからだは、躍りあがって「はい」と叫んだ。(「うたのように」)

十六歳というと、大岡信が詩を書き始めた頃にはぼ、当る。もちろんこの「十六才」を文字通りに受け取る必要はないわけだが、そのように考えても多分間違はないだろう。

ところで、すべてに「いいえ」という心とは裏腹に、躍り上って「はい」と叫ぶその肉体——このような青春のあり様は、一般的に青春そのものの一特質を示すと同時に、その青春が、内に屈折して歪んではいない、生理的に健全なものであることをも示している。実際、わたしが彼の初期詩篇を通して感じるのは、愁いや哀傷があつても陰鬱さのない、いわば傷ついていない幸せな青春のイメージであつて、そこにわたしは、学者歌人大岡博の愛息子としての大岡少年、温かく恵まれた家庭に育ち、いくらかはのんびりした地方都市で青春の日々を過ごした秀才少年のイメージを、そのまま重ねて見たい誘惑に駆られるのである。育ちの良さ、とわたしは勝手に想像するのだが、今日の大岡信について言われる幅広い理解力や、ランスのとれた判断力などは、恐らくその育ちと無関係のものではあるまい。ちなみにわたしは寺田透の

一文「大岡信につき」の冒頭に寺田透が紹介している、息子大岡信をうたった父大岡博の慈愛に満ちた短歌数首を思い浮かべつつ、右のような想像を試みているのであり、さらにこれも恣意に及ぶが、大岡信と同じく『権』グループの一員である同年生まれの詩人、知識人の父親を持つて恵まれた家庭環境に育ち、水々しくナイーヴな感受性をその出発時の詩に示している谷川俊太郎の場合をも、近くに位置づけて考えているのである。事実、大岡信の初期の詩には、資質的に見て、谷川俊太郎の初期の詩との親近性がはっきりと認められると、わたしは思う。

さて少々筆が勝手に滑った感じもするが、とにかく出発期の大岡信の詩には、青春の夢を織った伸びやかな抒情詩が多く、またその詩の中でうたわれる彼の青春時は、△まことにおれは、甚だしく開花を夢みてさまよつた。▽△空に深く突きささつた柱のさきで、広大な天と釣合つていた十八才よ。▽(「Presence」)とふり返られるような性質のものであつた。

けれども、当然のことながら、彼の青春はいつまでも優しさの顔を持ち続けてはいなかった。

## 1

最初、わたしの青空のなかに、あなたは白く浮かびあがつた塔だった。あなたは初夏の光の中でおおきく笑つた。わたしはその日、河原において笹舟をながし、溢れる夢を絵具のように水に溶いた。空の高みへ小鳥の群はひっきりなしに突き抜けていた。空はいつでも青かつた。わたしはわたしの夢の過剰でいっぱいだった。白い花は梢でゆさゆさ揺れていた。

## 2

ふたたびはその掌の感触に  
わたしの頬の染まることもないであろう  
その髪がわたしの耳をなぶるには  
冬の風はあまりに強い

わたしの胸に朽葉色して甦える悲しい顔よ  
はじめからわかつてたんだ  
うつむいてわたしはきつく唇を噛む  
今ももう自負心だけがわたしを支え  
そしてさいなむ

ひとは理解しあえるだろうか  
ひとは理解しあえぬだろう

## (二連略)

明日こそわたしは渡るだろう

あの吊橋

ひとりづつしか渡れないあの吊橋を

思い出しげみは 二月の雨にくれてやる (「青空」)

この詩は「1」で、過剰な夢に酔っていた、だが美しい過去の思い出をうたい、「2」で現在の失意の情(意識の苦渋)と明日への出発の決意をうたうという対比の構造を持つている。この「1」と「2」との対比が実にあざやかで、それだけにはっきりと、「1」の精神状況から「2」の精神状況への転移がここからは見て取れる。その間に何があつたか。そこからはかなり明瞭に失恋の体験をうかがうことができるけれども、そのことは今は深くは問わない。要は「2」における、失意から新たな出発へと、う「わたし」の心理的経過を見ておけばよい。そして『記憶と現在』中の詩篇には、特にその「夜の旅」の章の詩には、類似の心理的狀況をうかがわせる詩が他にもいくつか見出されるのだ。

△あてどない夢の過剰が、ひとつの愛から夢をうばつた。  
おごる心の片隅に、少女の額の傷のような裂目がある。突堤の下に投げ捨てられたまぐろの首から吹いている血煙のように、気遠くそしてなまなましく、悲しみがそこから吹きで

る。

(青春)

△すでに整然たる磁場はくずれた。私は沙上をさまよひ歩く。私は窓に記憶のノートを撒き散らす。落日。森の長い影が私の内部に伸びている。私は夜に入ってゆく。

(二十歳)

さらに彼の一種の詩的自伝と見られる「Presence」中にも次のような一連があることに注意しよう。

△やがて炎の季節が来た。「おまえの中の小さな炎の平和こそ焼き尽さねばならないのだ。」沈んだ声が囁いて遠ざかった。おれは待った。炎はある秋、女の眼の奥にかくれて現われた。だがそれがおれの中によびさましたのは、おれ自身の再組織だった。炎は苛酷な抽象だ。その中でおれは記憶を喪失した。イメージがとどまることなく溶解し、転位するとき、記憶とは行為、純粋な意識の行為にはかならぬ。過去こそそこに欠けたもの、おれははげしく現在に生きた。

(Presence) △第四歌

失意は旅立ちをうながし、旅立ちはこの十分に自覚的な若者を、冬の季節へと眼覚めさせる。「一九五一年降誕祭前後」「ある季節のための証言」「いたましい秋」などの諸篇には、時代の不安が色濃く影を落とし、この暗い季節に生きる青春の痛ましさが消し難く刻印されている。

雨に濡れた椅子から垂れさがる 死

公園のこちらの隅から煙っている街はずれまで

墨塗りの静かな椅子の葬列……

おれたちの青春は雨にうたれている

……

紙上に撒かれた鉄の粒子

黒い磁場に整列する

日本列島……

……

雨にうたれた黒塗りの青春

死を分泌しそれによって肥ってゆくおれたち

腐敗はすでに純潔の影の部分

その人知れぬ成熟にはかならぬ

みよ 灰色の曙に

隠湿の地にふるえる影をおとしている茸のむれ

おびたしい流血に

地の塩は おれたちにはもう

過剰である (一九五一年降誕祭前後—朝鮮戦争の時代—)

一九五一年(昭26年)というとき、大岡信は当時二十歳、東大文学部国文学科に在学中であった。その当時、彼がどのような文学活動を学内で行なっていたか、わたしはつまびらかにし得ないが、この年わたしは彼より二年おくられて東大駒場に在学中であって、その頃の学内の雰囲気をよく記憶している。前年の六月に勃発した朝鮮戦争に基因して、国内の反動化が一挙に進み、反動的政治家の追放解除、対日平和条約および日米安保条約調印、共産党の武装闘争方針の決定などの政治的事件が次々と起る。学内でも反戦平和のスローガンが高く叫ばれ、学生たちの政治的活動も活発であった。進んで学生運動に身を投じるタイプの学生では大岡信はなかったろうが、シャープな時代感覚を持つこの伶俐な若

者が、時代の現実には敏感でなかったはずはない。彼は当時の多くの学内詩人たちのように政治詩を書く方向には進まなかったが、それでも、時代の現実に対して一定の距離をおきつつ、「証言」の形で時代を記録するいくつかの詩を残している。

だがしかし、時代の現実がどうあろうと、若者は生きねばならぬ。

ぼくは舗道に真珠をひろう

ぼくは生きる 影像の林の中に

心のいとに張りめぐらされた音符の上に

ぼくは生きる 雪の上にしたたる滴の穴の中

錢苔のひらく朝の湿地に

ぼくは生きる 過去と未来の地図の上に

……

おおぼくは生きる 風に吹かれる肉感の上に (生きる)

大岡信の、特に『記憶と現在』の「春のために」の章に収められた詩篇中には、新たな愛の体験を経た上で、自己の生きるべき方向、特に詩人としての生き方を求めて、それを探ろうとしている詩がいくつも見出されるように思う。右に引いた一節では、彼が、自己の感受性を満開にし、すべての感覚を解放させて、そこにおのれの生きる道を見出そうとしていることが読み取れる。このような方向は、彼がその当時書いた詩論の中の次のような一節と正確に見合うものであった。

△ぼくは、詩は詩人の肉声をつたえ、べきものだ、と頑なに信じている。……高村光太郎の『道程』が、三好達治の『測量船』が、菱山修三の『懸崖』が、小野十三郎の『大阪』が人をうつつのは、どういう理由でもない、そこに詩人の肉声がきかれるからだ。しかもその肉声が、ぼくらのものでさえあるほどに厚みと幅と繊細さをもっているからだ。肉声に対して恥を感じるというくせは現代詩がもった悲しむべき病である。それはそのまま、詩人の声の貧弱さを示すものだから。(傍点引用者)

右は、昭和二十八年六月に書かれた、大岡信の最も早い時期の代表的詩論の一つである「現代詩試論」(後、最初の詩論集『現代詩試論—昭30年刊—に収録)中の一節であり、ここで言われているような肉声の重視ということは、まさに大岡信のみならず、『権』グループの谷川俊太郎、川崎洋らを初めとする、大岡信のいわゆる△感受性の祝祭の時代△の詩人たち全員に共通する志向であった。

だが、詩人はいつまでも同じ段階にとどまっていられない。大岡信は、昭和三十一年七月の日付を持つ『記憶と現在』「あとがき」の中で、こう書いている。

△すでに詩論集『現代詩試論』でぼくの詩に対する考え方の原型ともいえるべきものはある程度明らかになってきたと思っているが、ぼく自身が今一つの転換点に立っているように思う。一言でいえば、ぼくが意識的、無意識的に作ってきたぼく自身の詩を、どのようにして打ち破るべきかということが、ぼくの現在の問題なのだ。この詩集が一つの転機になることをぼくは願っている。

詩人はいわば自らの詩を作るうとして詩を作る。これは逆説でも何でもない。詩を作ることは、自己の詩法を作ることだ。しかし、作られた詩は、また自らをさしほる。かくして詩人は、自らの詩法をうち砕きつつ、新たな詩の旅へと出掛けなければならぬ。それでは大岡信は、どのような方向へと自己の進路を導いて行ったのか。

以下省略